

ワケ カタチには理由がある(34)

～三菱局地戦闘機雷電(ジツムツ)



〔↓同じく堀越二郎設計の九六式戦闘機と：操縦席がとて広いことがよくわかる〕



本機は、日本海軍が局地戦闘機、つまりインターセプターとして開発を命じた単発戦闘機で、1942年に初飛行しています。堀越二郎が設計した機体ですが、大馬力ながら大型の火星エンジンを採用したため、空気抵抗を小さくするために機首を絞り、プロペラまでを延長軸で繋ぐというアイデアを採用しました。しかし、この延長軸とプロペラの相性が悪かったのか、悪性の振動問題が生じ、この解決に時間を費やすこととなります。日本海軍は、太平洋戦争緒戦で無敵を誇った零戦が、連合国軍の新鋭機の登場でこんなに早く劣勢に立たされるとは想像していなかったのでしょう。この回り道が、結果として次期艦上戦闘機である烈風の登場を遅らせることにもなりました。雷電は600機強が生産され、首都防衛の要、厚木飛行場の302航空隊は、この機体を使用してB-29の迎撃に当たりました。胴体がとても太く江戸時代の名力士の雷電為衛門を連想させるどっしりとした外観を有しています。このため、零戦などに比べるとコクピットは不必要といえるほど広く、古参の操縦者たちは「宴会が開けるほど」と皮肉っていたそうです(「零戦開発物語」小福田皓文著 光人社NF文庫)。

【模型について】

チェコのSWORD製1/72のインジェクションキットです。チェコでありながら、このメーカー、流星、彩雲など多くの日本機を、他社1/48のキットを参考に1/72でリリースしてくれており、1/72ファンはたいへんありがたいメーカーです。なお、この機体を製作した一つの理由は、胴体側面に描かれた日の丸が、前方から見ていかにゆがむかを立体で検証したかったからですが、写真の通り「大リーグボール」並みに(古！w)、ひしゃげることがわかりました。(中川裕幸 2021年7月)